

次期マスタープランの策定に向けた課題等

1. 設置目的への「健康維持」の明記について

- (1) 本県では更に高齢化が進み、平成37年には『約3人に1人』が高齢者となることが見込まれていることから、高齢者自らの健康維持が大変重要であるとされていること。
- (2) 介護保険制度の見直しにより、高齢者の介護予防が求められているが、社会参加・社会的役割を持つことが生きがいや介護予防につながるとされていること。
- (3) 上記のことから昨年度先行して学部名の改称や、健康維持を重視した学習内容への見直しを図ったこと。
- (4) この考え方は、健康・生活学部だけでなく、造形学部でも重要であり、生涯大学校全体として、高齢者の健康維持を推進していく必要があること。
- (5) 園芸については、立つ、しゃがむという動作や自然の移り変わりを実感すること、また、陶芸については、指先を使うことや創造をすることが、心身のリハビリ、認知症の予防など介護予防につながるとされていること。

以上のことから、生涯大学校の設置目的が規定されている「千葉県生涯大学校設置管理条例」に「健康維持」を加えることを検討することとしたい。

《県の果たすべき役割について》

生涯大学校マスタープランでは生涯大学校の果たすべき役割（＝県の役割）として、

- ・ “生きがい・健康・仲間づくり” の支援
- ・ 地域活動の担い手の育成
- ・ 市町村と連携・役割分担した学習・活動の場の創出

を掲げており、「地域活動の担い手の育成」や「市町村と連携・役割分担した学習・活動の場の創出」については、一定の効果が出てきたが、今回、「健康維持」を生涯大学校の設置目的に加え、学習内容も見直していくことで、より明確に役割を果たすことができる。

2. 造形学部 of 修業年限等について

- (1) H24 年度の見直しにより、地域活動科目を入れたことで、1 年間では、技術習得の学習時間が短縮され、これに伴い、学習内容も基本的な知識習得中心のカリキュラムにならざるを得ず、自信を持って地域活動を行うまでの技術が身につかないことから、趣味で終わってしまうケースが多い。
(特に園芸では、植物の成長サイクルと学習年度が合わず、中途半端)

【造形学部園芸コースの授業単位数】

マスタープラン以前 (平成24年度)		
《一般課程》		
	一般教養科目 ※学校行事含む	園芸専門 科目
1年	33	44
2年	33	44
小計	66	88
《専門課程》		
	一般教養科目 ※学校行事含む	園芸専門 科目
1年	12	22
2年	10	24
小計	22	46
合計	88	134



マスタープラン以降 (平成29年度)			
	一般教養 ※学校行事含む	地域活動 科目	園芸専門 科目
1年	8	8	58
小計	8	8	58
◎マスタープラン以前と比較し、△30単位			

- (2) 卒業後に地域活動を行うには、「きっかけ」が重要な要素であり、クラブ活動や学生自治会活動を通して、学部を超えた横のつながりができることにより、地域活動の広がりが期待されるものの、1 年間の修業年限では、仲間づくりが深まらない。
- (3) 地域活動の担い手育成は生涯大学校の重要な役割の一つであり、健康・生活学部 (旧地域活動学部) では、卒業生の地域活動実施割合が 8 割を超えるなど、着実に効果が表れてきているが、造形学部においても同様に進めるためには、卒業後の地域活動の道筋となる地域での実習を組み込む必要がある。
- (4) 修業年限を見直した場合、定員や授業料についても検討が必要となる。

3. 次期マスタープランの策定にあたって行った検証

(1) 積極的な地域活動の促進、卒業生の地域活動状況

①卒業生の地域活動実施状況について、マスタープラン運用直後の平成25年度卒業生と1年後の27年3月卒業生で比較したところ、

①地域活動学部（25年度卒業時点：生活科・福祉課）	60%→80%（20%増）
②造形学部	53%→64%（11%増）

という結果となり、特に地域活動学部においては、地域活動実施割合が8割を超えるなど、着実に効果が表れてきたことから、造形学部についても同様に進めるため、卒業後の地域活動の道筋となる地域での実習を組み込む必要がある。

②造形学部の地域活動の担い手育成が進んだ要因としては、平成25年度より、造形学部にも地域活動科目を設けたことや、卒業後に指定管理者が任意で実施する自主講座においてスキルアップが図れたことが一因と推測される。

③造形学部の地域活動の主な分野は以下のとおりである。

《造形学部園芸コース》

- ・施設・公園・道路など街における除草や花壇整備
- ・里山での下草刈りや憩いの場づくり
- ・庭木の剪定ボランティア など

《造形学部陶芸コース》

- ・夏休みを利用した親子陶芸教室や地域の中学校で陶芸の講師役
- ・デイサービス等で定期的に行う陶芸教室
- ・地域イベントにおける作品のチャリティー販売 など

(2) 地域における卒業生の活動ニーズについて

平成29年4月に市町村社会福祉協議会を対象に「生涯大学の卒業生の活動ニーズに関する調査」を実施したところ、54市町村中48市町村の社会福祉協議会から回答があった。

「卒業生の地域活動認知状況」については、

①卒業生がボランティアセンターに登録して実施している	22市町村（45.8%）
②卒業生または生涯大学と連携した活動を行ったことがある	8市町村（16.7%）
③卒業生が地域活動をしていることは知っているが実態は不明	15市町村（31.3%）
④知らない	3市町村（6.3%）

という結果となり、①と②を合わせ、生涯大学校卒業生の地域活動において、「6割強の市町村社会福祉協議会で連携が図れている」という結果となった。

また、

「上記設問で③及び④と回答した18市町村の今後の生涯大学校との連携意向」については、

①連携をしたいが、卒業生の情報がない	8市町村(44.4%)
②連携をしたいが、生涯大学校との連携方法が分からない	7市町村(38.9%)

と、「8割強の市町村が生涯大学校(及び卒業生)との連携に前向きである」という結果となった。

さらに、

「卒業生に望む地域活動」では、多いものから順に、

①高齢者の見守り活動	30市町村(62.5%)
②地域の高齢者の生活支援	27市町村(56.3%)
③災害ボランティア活動	23市町村(47.9%)
④施設入所者へのレクリエーション	13市町村(27.1%)
④子どもへの伝統技能、昔遊びの伝承	13市町村(27.1%)
④公園・施設等での樹木剪定や花壇整備及び自宅以外の庭木の剪定	13市町村(27.1%)
⑤街の清掃・美化活動	11市町村(22.9%)

であった。「施設入所者への陶芸教室」も5市町村(10.4%)から回答があり、「④子供への伝統技能、昔遊びの伝承(13市町村(27.1%))」の中にも「子ども(親子)陶芸教室」が含まれていることを想定すると、園芸及び陶芸の技術を活かした地域活動については、一定のニーズがあるといえる。

(3) 民間の生涯学習事業の展開状況

- ① カルチャーセンター等を含む教育、学習支援業の事業所数をみると、京葉学園地域と東葛飾学園地域に、81%の事業所が集中し、民間の学習の場がほとんどない地域もあり、依然として、県内全域に等しく学習の場があるとは言えない状況である。

学園区域	京葉	東葛飾	東総	外房	南房	合計
事業所数	2,307	2,742	297	422	446	6,214
構成比	37.1%	44.1%	4.8%	6.8%	7.2%	100.0%

資料：平成26年経済センサス基礎調査(総務省)

- ② さらに、園芸・陶芸講座の展開状況では、全国民間カルチャー協議会に加盟している県内カルチャーセンターについては、大半が京葉学園地域、東葛飾学園地域に偏っている。
- ③ 陶芸については、カルチャーセンターを含め、民間事業者も開講しているが、ごく基礎的な内容を全6回程度の開講回数で提供している事業者が大半であり、生涯大学校と比べて、受講料も4倍程度と高齢者にとっては負担が大きくなっている。
- ④ 園芸については、民間事業者においても開講しているところは、ごく一部（不定期）であり、内容もガーデニングの知識など、趣味的要素が強く担い手育成の視点からの学習内容ではない。対して、生涯大学校では、樹木の特性や病害虫の防除等、園芸について総合的に学べる体系となっている。
- ⑤ 生涯大学校は、実習場所を有している点やノウハウの蓄積により、民間のカルチャーセンターと比べ、安価で長期にわたり、専門的な知識や技術を提供でき、仲間づくりもできることから、高齢者からのニーズも高く、卒業後の地域活動につながりやすい。

(4) 市町村の人材育成状況

- ① 市町村が設置する高齢者専用大学のうち、ボランティア人材の育成を行っているのは、千葉市と船橋市のみである。
- ② また、高齢者向け講座を開設している市町村は、千葉市・船橋市を除いて、25市町村あるが、松戸市、佐倉市、流山市、浦安市等の一部の市を除き、開催頻度は、月0.5~2回であり、内容も健康づくりや趣味的な講座を開催するに留まっている。
- ③ さらに、東総地域や南房地域の市町村においては、高齢者向け講座を開設していない割合が高い。
- ④ 園芸及び陶芸に関しては、園芸の実習場を有している市町村は、千葉市のみであり、陶芸窯を有している市町村もいすみ市など一部の自治体に限られている状況であることから、市町村における園芸や、陶芸の知識や技術を活かした地域活動の担い手育成は難しい状況にある。

(5) その他

- ① 自らの経験や技術を活かして社会貢献を行うことで、生きがいや、介護予防につながる効果が期待されている。
- ② 平成28年版高齢社会白書の「高齢者のグループ活動参加による効果」では、「健康や体力に自信がついた(約45%)」、「地域社会貢献できた(約28%)」、「技術、経験を活かすことができた(約20%)」という結果となっており、生涯大学校での学びを『趣味』から『得意分野』にすることは、健康維持や地域貢献だけでなく、生きがいづくりにもつながる。